万力林のターザン
この物語の主人公、マキちゃんは女性の様な名前ではあるが彼はれっきとした男性である。今年 86 歳になるがっしりした肩の上にいつも人懐っこい笑顔を乗っけた好々爺である。
私がマキちゃんを初めて知ったのは小学校 3 年くらいだったと思う。我々悪戯仲間は夏休みになると近くを流れる笛吹川へ水浴びに行っていたが、あるとき仲間の一人が噂を聞きつけて「根津公園にターザンが居るっちゅうから行ってみざあ。」ということになり、皆でわいわい言いながら万力林の中にある根津公園に行って見た。
ご存知の方も多いと思うが、根津嘉一郎は東武鉄道の創始者で、日本の鉄道王と呼ばれ、若尾一平などと共に甲州財閥の一人であり、東郡(ひがしごうり、現在の山梨市を中心とする地方)の立志伝中の人である。根津公園は彼の偉業を称えるために万力林の中に 1 辺が 150m、周囲約 600mの四角い堀を配し、その中心にある大理石の台座の上に銅像が立っていたようだが戦争中に撤去され、私が子供の頃は荒れ果てた公園の跡地であった。堀の水も茶色く濁り、水底には落ち葉が沈んで異様な臭いを発していたが、流れのある笛吹川より泳ぎやすいと言うことで、そんな不衛生な堀で悪戯小僧たちは泳いでいた。（現在は銅像も復元され根津公園も昔以上に綺麗に整備されている）
そんな子供達の中心にいたのが、立派な大人の筋骨隆々としたターザンことマキちゃんであった。
我々新参者は一宿一飯の恩義にあずかる渡世人のように、マキちゃんのところへ行き、「俺たちもここで泳がせてくれんけ？」と仁義を切って、マキちゃんの取り巻きの仲間に入れてもらった。
彼は子供たちの中に入っても人懐こい笑顔を浮かべ、たまに「危ないから気を付けろ。」と言う位で我々には殆ど干渉しなかった。水から上がって甲羅干しをしているとき、マキちゃんは一人でブツブツと英語を話していた。皆は何故彼が英語を話しているか理由がわからなかったが、彼の格好よさだけは認めていた。
当時はオリンピックで活躍した古橋や橋爪が憧れの的だったので、我々はマキちゃんに根津公園の堀を 3 周（1,800m）して見せてくれとお願いした。「オーケイ。」と言ったと思ったら堀の石垣の上から飛び込んで見事なクロールで泳ぎ始めた。我々は四角い堀の 1 辺、150mを泳ぐのさえ苦しくて直ぐ止めてしまったのに、瞬く間に 1 周し、2 周目に入り、堀の周りの石垣の上から声援を送る我々を尻目に殆ど息も切らさずに 3 週目を泳ぎ切って見せた。映画館で見たジョニーワイズミューラーのターザンよりはるかに格好良く、仲間の一人が「ターザン、ジェーンはどうしたで？」と聞いたら一瞬複雑な表情を浮かべた後、

遠くを見ながら英語でブツブツ何かを話し、寂しそうに笑っていた。

その頃のマキちゃんの職業は駅前にある自転車置き場の管理人だった。当時の交通手段は自転車が主流で、勤め人も学生も遠くから自転車に乗って駅に集まり、それをマキちゃんの店に預けて汽車で通勤通学をしていたので、マキちゃんは何百台もの自転車を預かり、朝晩出し入れしていた。だから昼間は割と暇で、水遊びに付き合ってくれていたのだと思う。

山梨を離れて約半世紀経った 2006 年、私が郷里に骨を埋めるべく山梨市駅に降り立ったとき、駅前は一変していた。東西に走る駅前道路から直角に北に延びるメイン道路は市役所を経由して隣の甲州市に繋がる市の中心道路であるが、何とそんな駅前の一等地の南西の角地に自転車やバイクを置く店があるではないか。後で知ったが、そこは、区画整理前にはずっと東にあったマキちゃんの店が移転して、その一等地に移ったのだそうだ。つまりマキちゃんは半世紀以上にわたって山梨市駅前の自転車置き場を経営する店の主人を続けていたのである。
我が家の近くにある中華料理屋のお婆さんは純粋な甲州人で、山梨市のことについては知らないことはない気の良い婆さんである。帰郷後そのお婆さんにマキちゃんのことを聞いてみた。彼女曰く、「マキちゃんは東京に出て、彼女に振られてから田舎に帰ってきて、50 年前からずーっと自転車置き場をやっているだよ。変わり者（もん）じゃんね。」ということであった。

我が家からマキちゃんの店がある山梨市駅前を経由して根津橋を渡り、万力林の中を通って林の北端にある千鳥湖までの往復が私のジョギングコースである。そのうち、ジョギングの途中でマキちゃんのところ寄り、おしゃべりを始めたが、寄る年波であまり記憶がはっきりせず、昨日会ったばかりなのに「あんたは誰だっけ？」と聞かれたことが何度もある。

ある年の夏の夕暮れ、ジョギングの帰りに見るとマキちゃんがベンチに座って夕涼みをしていた。私は彼の隣に座って、ふと思いついて英語で話しかけてみた。
「Do you speak English, as you have done before?　（マキちゃんは、まだ以前のように英語を話すの？）」と聞いたら、彼の答えは「Sure, I do.」とはっきりと言うではないか。英語で話しているときの彼の顔は、今までの好々爺からはとても想像できない怒りを含んだ様な精悍な顔つきに変わっていた。彼の英語はテキサス訛りのある聴き取り難い発音であったが、会社にいるころ我々と

共同で仕事をした会社のオフィスがヒューストンにあって、私はそこに数カ月滞在したことがあるので、テキサス訛りには慣れていた。
「マキちゃんは高校を卒業してから立川の基地にいたそうだね？」と続けて英語で聞くと、驚いたことに今までの彼とはまるっきり違うマキちゃんが、テキサス訛りの英語でこんな話をしてくれた。聴き取り難いところや、彼が英語を忘れために日本語とちゃんぽんになったところもあったが、こんな内容の話だったと想像する。

「俺は田舎の高校を卒業してからアメリカに行きたくて、何か進駐軍の仕事がないかと東京に出た。立川にある進駐軍のキャンプにガーデナー(庭師)を派遣する会社があり、人員を募集していたので俺は見習いでその会社に入ることにした。3 か月間は先輩庭師の後について、キャンプの中の芝生の手入れや住宅街の庭の手入れを手伝った。その間に一生懸命英語を習った。将校の家の庭の芝刈りを手伝うから英語を教えてくれと頼んで、めきめき英語が上達した。庭師の中で一番若いのに一番英語が出来るようになったから、半年後に俺は本採用となって、一番山側に建てられた高級将校用の住宅 5 軒専門の庭師になった。若さと運動神経の良さから水泳やベースボールにも駆り出され、アメリカの兵士たちとも打ち解けてきた。元々山梨の百姓の出だったので、庭仕事は全然苦にならなかったし、将校婦人たちとの会話も楽しく充実した毎日を過ごしていた。
庭師になって 3－4 年経ったある日、5 軒の将校夫妻が集まってバーベキューをやるので準備を手伝ってくれと頼まれ、買い物から様々な道具をそろえた上、日本流の味付けをして大いに重宝がられた。その時知ったのだが、5 人の内 4 人の奥さんたちは 50 歳くらいの年配だったのに、一人だけ 30 前の若い綺麗な婦人がいて、彼女がアルダグ氏の夫人のジェーンだと知った。アルダグ氏の隣のシュルツ氏の家の庭の仕事をしているとき、シュルツ夫人(名前はアイリーンだった)からジェーンはアルダグ氏の 2 番目の奥さんだから、ご主人とは 30 歳も年が離れていると聞かされた。シュルツ夫人は落ち着いた気立ての良い婦人で、俺になにくれとなく好意を示してくれていた。
ある日、シュルツ家の庭の手入れをしているとき、大きな物音がしてジェーンが悲鳴を上げながら家から転がり出て来た。アイリーンと共に見ていると、大男のアルダグ氏がジェーンを追いかけて殴りかかっているではないか。俺は咄嗟にジェーンを庇いアルダグ氏の前に立ちはだかった。アルダグにとっては憎きイエローモンキーのジャップが自分の妻の助太刀をしていることにさらに腹を立て、棍棒のように太い腕で俺を殴り飛ばし、俺の後ろに隠れていたジェーンを引きはがしにかかった。痛さに堪えながらも俺は殴りかかるアルダグ氏を

止めようと彼の腕を抑えた時、真っ赤になって怒っていたアルダグ氏が一瞬動きを止めて立ち止まったと思ったらそのまま地面に突っ伏して倒れてしまった。」

マキちゃんの話の最中、預けていたバイクを取りに来た高校生のために話を中断して、その高校生に預かった自転車を渡し、また夕涼みのベンチに戻ってきたときには、今まで話をしていたマキちゃんではなく、以前の好々爺のマキちゃんに戻っていた。私と何を話していたかさえも覚えていない様子だったので、その日は、ジョギングの残りをしながら家に帰った。
次の日、昨日と同じころ、また夕涼みをしているマキちゃんを見つけ、昨日までの話をして、その続きを話してくれと英語でお願いした。どこにこんな活力がるかと思うほど生き返ったマキちゃんがテキサス訛りで昨日の続きを話してくれた。

「気を利かせたアイリーンが救急車を呼んでアルダグ氏を載せて基地の病院に運ばせた。それと同時にやってきたＭＰ（Military Police の略、軍警察のこと）に、俺は手錠を掛けＭＰの警察署に連れて行かれた。
アルダグ氏は、亡くなったが、司法解剖の結果心臓発作だと診断されたそうだ。一晩留置場に留め置かれ取り調べを受けたが、ＭＰ側は俺がアルダグ氏に暴力を働いた結果アルダグ氏が亡くなったと疑い、相当きつい尋問が行われた。いくら英語が出来るからと言っても、専門用語を駆使して話す検察側に俺一人で対応することは出来ず、シュルツ夫妻の必死の説明と共に、顔を殴られて腫らしているジェーンの涙ながらの説明で、俺の側には殺意などもとよりなかったし、事件に巻き込まれただけであることが判明した。一番説得力のあった説明はアイリーンが話したアルダグ氏によるＤＶ（Domestic violence　家庭内暴力）だったと思う。俺は翌日の夕刻、釈放された。
身元引受人となったジェーンは俺を自宅に連れて行き、アルダグ氏に殴られた傷跡の手当てをして、俺の行為に感謝して食べきれないほどのご馳走を用意してくれた。
食後、薄暗くした部屋の中でジェーンは俺に目隠しをして、俺の手にジェーンの熱い肌を押し付けて彼女の意志を伝えてきた。ジェーンは狂ったように俺を求め、丸々2 日間俺もジェーンを貪り続けた。」

マキちゃんの言葉を借りると「We have kept making love for entirely two days and nights.（二日二晩愛し合い続けた。）」そうだ。

そのことを語っているときのマキちゃんの顔の凛々しさは、とても 86 歳の老人には見えない精悍さがあった。その上、冷やかしの言葉を発することが憚れるような近寄りがたい威厳さえ具わっていた。

「しかし、ＭＰに連れられて留置場で一晩過ごしたことが、庭師の派遣会社に知れ、俺は間もなくその会社を首になった。
失意のなかで山梨に帰り、父がやっていた駅前の自転車置き場の仕事を継いだが、アメリカへの、そしてジェーンへの夢は捨てがたく、仕事の合間にも俺は英語の勉強を続け、何時かアメリカに渡ろうと思っていた。」

私はジョギングをするとき、飴玉を 3 個持って出かける。これは走っている最中に突然血糖値が下がり、殆ど気を失いかけたことがあったので、それ以降甘いものを持ってでかけることにしていた。その日も飴玉の一つをマキちゃんに上げたが、マキちゃんは話に夢中で、飴玉を指でもてあそび、包み紙をカサカサさせながら話し続けていた。

夕闇が迫り、心なしかマキちゃんに疲労の色が見え始めた。今までの精悍な顔がうつむき加減になり、指でもてあそんでいた飴の包み紙の音がしなくなった。不思議に思ってマキちゃんを見たとき、私は自分の目を疑った。マキちゃんが人目もはばからず大粒の涙を流し、その涙で飴の包み紙が濡れていたからである。しかし、その直後、最後に絞り出されたマキちゃんの言葉に、大袈裟でなく、私は自分の頭の中に雷が落ちたような衝撃を感じた。

「Jane, you don’t know, how much I loved you.(ジェーン、私がどれだけお前を愛していたか分からないだろうな)」

マキちゃんは、今までの話を私にではなく、ジェーンに語りかけていたのであった。

私が子供の頃会ったのは、マキちゃんが立川から帰って間もない頃だったと思う。
その後マキちゃんの父親が亡くなり、母親から、先祖代々の土地を捨ててアメリカへ行こうなどと言うマキちゃんのダッチモナイ夢を捨てさせられ、現在に至るまで駅前で自転車の出し入れをしている。

近所の中華料理屋のお婆さんの言う「彼女に振られた変わり者」という言葉の

本当の意味を知った今、私はマキちゃんの一瞬にして燃え尽きた筈の青春が、その炎の亡骸を抱き続けて過ごしてきた半世紀にも及ぶ長い年月に蓄積した灰の下で、本人が全く気付かないまま、まだ強烈な輝きを持って燃え続けているのを知り、マキちゃんの気高さに心を打たれた。

マキちゃんは今日も、50 坪ほどの店に 1 台 100 円の自転車と、1 代 200 円のバイクを預かり、朝の 7 時から夜 9 時過ぎまで働いている。

完